

大空 (生徒・保護者向け) 21号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和2年10月9日(金)

LIFE・SIFT—人生100年時代を支える学問—(1・2年教育課程説明会挨拶)

□本日の概要

- 人生100年時代を迎える今、以下の3つの視点が重用になる。
 - (1) マルチステージの人生
 - (2) 家族構成の変化
 - (3) 生涯にわたる学び
- 基礎学力は「知識・技能」だけでなく、「学びに向かう姿勢」も含まれる。若い時代に身につけた学問に向かう姿勢が、生涯学ぼうという姿勢につながる。
- 東村アキコさんは「才能は頑張らなくてもできることだ」と言っているが、これは好きなことだからこそ頑張れるという意味である。この機会に生涯を懸ける学問を見つけて欲しい。

□人生100年時代で重要になること

8日、9日は本校の教育課程説明会(2年生、1年生対象)です。私たちは変化の著しい時代を生きています。これに、新型コロナウイルスの流行が加わりました。今後も私たちには、様々な試練や大きな変革の波が次々と訪れるでしょう。このように、変化の著しい社会を生きるために、私たちはどんな力を身につけなければならないかということをお話したいと思います。

2016年に発表された「ライフ・シフト」(リンダ・グラットン、アンドリュー・スコット著 東洋経済新報社 著者はともにイギリスの経済系の学者)という本はベストセラーになりましたので知っている人もいます。この本によりますと、2007年生まれの者(今の中学校1年生)の半数は107年以上生きると予想されています。この予想の真偽はともかく、2020年7月に厚生労働省から発表された日本の平均寿命は、男性81.4歳、女性87.5歳であり、先日の敬老の日に発表された日本の100歳以上人口も8万人を超えたそうですので、今後、100歳近く生きる人が増えていくことは確実でしょう。「ライフ・シフト」の提言は、高齢化が世界で最も進んだ国である日本に示唆を与えるものであり、次の3つの視点が重要になると指摘しています。

- (1) 3ステージではなく、マルチステージの人生
- (2) 家族構成の変化

(3) 生涯にわたる学びが重要になる

□(1)マルチステージの人生

今までは、「教育(約20年)→仕事(約40年)→引退(約10年)」という人生を3ステージに分ける考え方が主流でした。今後は元気な高齢者が増え、引退年齢は今後どんどん引き上げられるでしょう。人生100年というライフスパンで考えると、今までは引退としか考えられなかった第3ステージのターニングポイントで個人差が生じます。「ライフ・シフト」では、60歳を過ぎて働くことを、一生働かねばならないとか、いつまでも年金がもらえないとかマイナスに考えず、肯定的にとらえています。考えてみれば、長生きは人類の長年の夢でした。一度きりの人生ではなく、老後に新たな人生や新たな始まりがあると考えているのです。100年生きると考えると、60歳から新たな人生を始められるような知識や友人、様々な人間関係、地域とのつながりや学問に対する意欲など、お金やモノに替えられないもの(無形資産)が今まで以上に重要になると筆者は主張しています。

□(2)家族構成の変化

家族構成も変化します。この本にとりあげられていたのはアメリカのデータですが、1960年代には65%もいた、いわゆるお父さんが働いて、お母さんは専業主婦という家庭の割合は、2012年には22%にまで減少しています。恐らく日本も同様の傾向でしょう。日本の場合、欧米に比べ、女性の社会進出はまだ遅れています。100年生きるという長いスパンを考えると、これからの女性は、仕事を続け、その中でキャリアを磨き、社会的に活躍するという生き方を念頭に、どうやったら自分を成長させることができるかという進路を考える必要がありますし、男性も女性の社会進出に、今まで以上に理解を示すべきでしょう。

また、「ライフ・シフト」は、長寿社会になると、核家族から複数世代が助け合って暮らす家族形態への変化が生じるのではないかと述べています。そうすると、地域社会で、高齢者が若者世代の子育てを支援し、若者が高齢者を支援するような関係性が、これからはますます重要になるかもしれません。

□(3)生涯にわたる学びが重要になる

100年生きる時代になると、若い時に身につけた知識だけでは不足します。つまり、若い時の学問

に加え、一生学び続ける態度を身につけることが重要になります。学びが、高校や次の進学先で終わるのではないのです。

「ライフ・シフト」は、人生100年で必要なのは、「家族・友人・人脈・スキルなどの『無形資産』への投資」だと説きます。つまり、教育、すなわち、皆さんが様々な勉強をすることが、これからの長い人生を支える教養・資産となるのです。

「生涯学習」という言葉があります。一般的には、人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味でも用いられます。大人になってからも学び続けたり、あるいは40歳、50歳で資格を取ったりして、新たな職業や新しいライフステージに立つような生き方が必要になります。だから、「勉強が得意」でなくてもいいのです。まずは、「勉強が好き」であることが大切です。

また、「努力」や「継続」を重んじることです。「好き」で「努力」を「継続」したら、仮に職業にならなくても、自分の人生を支える柱の一つになるかもしれません。そのような柱を複数育てることが、マルチステージの生き方なのです。

□向上心を支える基礎学力

一生学びに向かう力の基礎、それが基礎学力といわれるものです。学力とは、「知識・技能」だけではありません。現在の学力の定義は、「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう姿勢」を含みます。ものを知っていることだけなら、コンピューターには勝てません。しかし、答えのない問いについて、現時点で最良と思われる解決策を考え、新たなものにチャレンジし続けることは、人間しかできません。

これから20代前半くらいまでに身につく態度で人間の基礎が形作られます。人間は生き物ですので、成長期というものがあります。誕生してから20代前半くらいまで、人は脳も体も驚異的に成長します。運動にしても、本を読んだり芸術に触れることも、この時期に触れているかいないかで、その後の人生が大きく変わります。

若い時に基礎が身についている人は、例えば、40歳ぐらいになって生活に余裕ができた頃に、新たに通信講座に取り組み始めるかもしれません。そのとき、テキストに向き合おうとか、レポートや検定試験にチャレンジしようという意欲が生まれるかどうかは、若い時の過ごし方にかかっています。つまり、生涯学ぼうという態度や意欲は、40歳になって突然生じるのではなく、20代前半くらいまでに身につけた学びに向かう姿勢で決まるのです。

□自分の学びたいものは何か

そう考えると、皆さんがこれから大学にかけて学ぶ学問は、100年にわたる、皆さんの人生を支える重要な学問になるのです。自分が生涯をかけてや

ってみたいことは何か。自分が本当に学びたいことは何かということを実際に考えてみてください。

将来、目標とする仕事が決まっていることは理想ですが、仕事がイメージしにくい学問分野も多々あります。学問に取り組むうちに、自分の興味関心も変化することもありますし、職業観も変わるかもしれません。高校時代には想像できなかったほど、皆さんの世界は広がります。今は大学に行くことで頭はいっぱいかもしれませんが、大学に行きながらダブル・スクールで学ぶこともありますし、留学だって考えられます。また、大学院へ進学する人もかなりいるでしょう。自分が大きく変化することを前提として、今の段階なりに、自分が本当に学びたいことは何かを考えてみてください。

□才能は頑張らなくてもできること

本校卒業生の漫画家東村アキコさんは、NHKのアサイチという番組で、「才能は、頑張らなくてもできることだ」という趣旨の話をしていましたが、これは、好きなこと、やりたいことだから続けられるし、頑張らなければならない所でも踏ん張れるという意味だと思います。東村アキコさんの自伝的漫画「かくかくしかじか」を読むと、美大受験のためにものすごい努力をする姿が描かれています。東村さんにとっては、やはり好きなことだからあれだけ頑張れたのでしょう。東村さんは、美大卒業後、宮崎に帰ってきて会社勤めをしますが、やはり漫画家になりたいという夢を捨てきれず、漫画雑誌に投稿した作品が認められデビューを果たします。本人はやりたいことをやってきたと言いますが、やりたいことを見つける、生涯情熱を懸ける対象を見つけることが、一つの才能なのかもしれません。

学問が職業に結びつくことは一つの理想です。しかし、学んだ学問と全く違う分野を仕事にしたとしても、学問を通じて得た知識や思考力、ものの見方などは、必ず、皆さんの力になります。

100年生きる人生、自分の力で、主体的に夢を描きたいものです。今回の教育課程説明会を契機に、自分はどんな人生を生きたいのか、そのために自分は何が必要なのか、どんな努力をしなければならないのか、考えて欲しいと思います。

